桐西一葉集　全

へ 5
4442

梧桐一葉集序

我翁はむかしきれうへ一とせ一葉に深
著にしるしまことに生れ出てよりして
なるかの人西行年をおくりしとなん
聞れしはじ桂をたつ余か松をはし愴う
ころく梓に行て新書に銘て絶を
留しこそ流るる句を流るる文
やそかふんとも翁見えぬ縁
その根をむすふしての桐を桐
しとなとかいはれ人葉ていふし
れこしなれや序一四何庵乃

へ5
4442
門 へ 5 4442 號 架 巻
昭和九年九月二八日 購求

主人紀逸

梅乃一葉上

蓮乃茎

芭蕉庵桃青著

連歌俳諧ともに渉る礼の事に秋の本句を
てれまで流して来れもなき遣してこれ迄なやしに
あるへしいつも句にあけたる人師ならしとは前句へ
心をほそふ和れの形ちゝめくまして此意をとなへ句
つふす又いゝまほこはきすけとし一句堪残に下らぬを
我れ句主ねてろふまてをさなぬる事かなりしか
至り一紙ねさてこゝろわぬもひたるやせてなく
私自ゆきを免をとへていふへん蓮乃茎を折

てん多しこきまハ切なくして云つも京子申る
をれしおもれゆくお雑をとれ穂おゐ丸さりけるを
なけるハ道れくこる切なる哭なりし西縁乃
かゝ京たりけるよくかゝりて素なる京住しきるか
ぬし舟遊乃縁とゝ趣示むて貴

王人乃菖蒲

一句めくりてハ王人乃あやめ子多をうけぎるも
うこらし池水よしまろくとおもひろめく清ら京
ゆくこ角なる香くたけし高く口子さハら尾
ゆらしとなりてたくん子云をしらるへし

萩の柱

なれぬ雨に梅てくき帰と起てとゐ沖とゐ
ぬるものなり蓋東西南北よしえてゐて
まうる用両の柱一本を紙覚をれ不たり
こゝろをたちつ欠ぬ雲は東西をたまひのなり
朴のめく前句の去るをも紙吟し近して
これ主をなる不もことん中すへし

乞食の為く云

乞食のふるハ雌しつゝこ山労このたる料物を
きふて浪ハあいる子海せて破る袋に入
杖へて開なまかれていかなて開ゆ歌道
の業四志道ま高根しある中る雨のせる子唐

七まものさはりなとは何えんせすして其句用へきし
よそあるねと替くめつらしき入て読ふへし
人乃名乃事
ひとの影は七字二肩ある事中なとのよし
あし良は太小若積色の黒き月日あるやらし無乃
深きやうなるとのなと連歌絶させ平
異なるは十七十四の文字なれともつゝ次第あせ名
詠言とは同物あれともうち内手本能時詠
先句の様積平にして絶あり上古にはなかりし
物なし意なる事は踏ふしつらねて本様しなき
いらぬさまは中さして横平無の深き書ても

眼の深き常に無才なし
太臣信の和歌は連歌乃公用京道
の覚悦まへきしつまるゝ進なる絶の制
一 五誠の事
秀句五誠し小秀句以へ左第小隔て秀句ふ
事あるし
其まゝ句いひかけ ひとひ句に秀句いひなをの
句次の句平て定めいらし 五誠あるし
一 字平かきてかんまつゝ事常の事なり
おもむきに當世借絶のさるとより華頂の文
字のかえ義理にみてまへかはこのんを深く文字

干てさゝる花紅葉なとに第一趣無の心ありとなり
一 俳言にて音声まて付ふる事好ましからす俳無
き連ねとて附し句はふるといは親子兄弟老人
高位なとなくさことまてあらゆる事連にも意なき縁
節けやうするまゝなしへ付
一 故事なる其の事を送るくみて句作りする
いとし楊貴妃照君関羽孔明なとは揃ひして
其名をさしていふて次の句の
移り麗なるへし
一 艶にて覚さる故事なとなとしてまとふを
詠まとひけらるや苦しいと見えたる

第一未熟の為なりとも
一 都鄙とても平句に附す人は能なりとなる事
へいひおしてもかなしあるまし 併して近年
是体は大やうに京都なとも中々事一句首尾の
まとはなるへし
一 花を雲にかへて川あげておの句の連に花
紛るゝなるへし
一 雑句中むし一生の花も捨事あくまてなる体
なるは少しもなりやりとなるへし
一 長短の句とても平いへ付てなるまいとふしくは世にたゝ
し 古家俳諧も連歌 俳諧は席曲流なる第一

そといへる連歌発句篇序題なれは頭句曲流
とわかれし給ひていつれも篇（冠五文字）序（肩七文字）
題（脇五文字）曲（腰七文字）流（皆七文字）なりき連歌まで
前句篇序題上れ句下の句を分ち配し頭句
曲流也に発句曲流なれは頭句篇序題と配あし
一二をあけてたとへは左のことし
（下の句）発句曲流なり
頭句篇序題なり
返しなき因を又なきなり（篇序なり）
星影の水橋の秋一本て（此まま橋をいふ）

又

（上ノ句）発句曲流なり
頭句篇序題の心なり
さもしらけのことくなる杜若けし（篇序なり）
寄見しも折り霞の秋（此の句けをいふ）

此なるを曲流ともいふ中の下句篇序題となりし
ゆへにて発句いひなりしやうは頭句にてわかれ
発句をよりおそらくは頭句にていひなりける
句毎にいひ残るならぬ趣味あるなり篇は
えしめて見し体に序は中五をわかちて題を
文字を越る体に曲を大きにとりよせ流を成し
したる体なり
一 発句親句より続き疎句と兼ねて頭句疎句と心
得へし親句といふはよくしたひまたのにやかて発句
あしらひたる句疎句とはよく変を見てしてさらりと
いひたる句なり親は縁言なりとみるにつきしく

和韻れさる句なり　謎は前句を川筋といひていふ
おもて句なり
一連歌の起りは何ハまりなる事　後鳥羽院の御製
なりとし於月くハ以下ハ連歌となりけるなり建保
の比より又武日丸言ひるなり後宇多院建治二年
道覚ニおゐて藤原為相に於て始なりしより建保よ
了ム六十三年後なり　新式を應安に比三百餘年
ほとなりし處　宗祇新式追加をる文亀の比逍遥院殿
相談牡丹花追加ありて其外年来式法ありし哉之
俳諧ハ二条此連歌の席みえて　五七句十句も附あひ
往しなるなり　俳諧音を賦歌ニ成たるなり

されて連歌は式目より至りけ来るものゝ
俳諧歌の人を初て　俳諧連歌といふ　我朝
ころ二句ハ五十句なるを詠けるなる見一説
京極貞徳なり連歌の式を語て大徳院御筆立
南々はなれハこれらりさしも絶りけむしけれ
俳諧一二を挙て
紅葉ちる蔦や何重のかつら錦　似如
千代ある船月に花乃あへさせ　京長
此秋の霜に白皿はもの見ゆて　京祇
こもし紹巴宗匠にて連歌何なれ後は　なみ菓子
のとて合点して

なしむる時ハ伝なし候ふへし　玄旨
松本新年にあたる夜もし　紹巴
雄とそみる松戸乃御師て　昌叱
かくのことく有れは連歌と申して　よしなる
やはらく句無あつていはんやをとなりて縁語を
うつまて歌いあり大連歌をやめる縁語ハあるまし
今世盲縁付縁語ハ本はやりに思ふに候なり
一　面も句はつる四句ぬ〆めりとて悟しまはりといふ
なり表句折まこ終りいたまなりし而も四句めまて
さのつることなくうあるこ終なり長くて八句
れうなる三四句五句六句七句八句まて似たやし平

よるなり大秘なり
一　無心不着といふ事ハ一句もきくるも前句につけ於之
五七七五七、おも数あれともちりもの取利むすふはあまり
初りるいはむ新年なる前よりも新や陽ハありかく
していなにかくしてよもやいなし正
体をこ忘れ前句にきされて無病ハあり
一　鎖乃面句といふ事ハ一句おうなる開キあまり如器財
道具物なとなとおし取方を言なるともなる句之
表句いはんや句を無理にいはなてぬれたる鎖乃
句になすなる此なる記さし
一　冠つはて掃鄙次皆なのなといふ事ハあり冠の次

とハ上の五文字中の七文字へ用なくして切る
なり　轉すとハ上の五文字下の五文字に縁
あるやうに中の七文字用に立るを皆なり次とハ
五文字七文字を連續して上の下の五文字用に
立ぬ支なり

冠さきて　正月あや春を迎ゆ　神ぞたのみて

皆なり次　面白とながめけり人の昨律今年

轉ぎは次　我春にをしかけて嘯は蝶に侍らして

たとへば分別あるべし爰と示すなり

一自他の句言外に行處なり他の句は自他の（我才）に隨
分句他の（人の上）句五文字は自他の句七五ハ他の句之

（自）くさしやる（他）叢をさ扇の木の影

（他）障子あけたる手に見ゆるとやしけり大
矢も比の後切あとへ言しくて
縁の上めをせきさしてかるさ蔵がし
六の句（障子の内外見ゆる）打の手の内身へ含き頼
句のもの比の初まへしるく此句をとらく付方にみ
て後へしさこととなり

一固意とは云外に句の句をと猶申にて叙したるや
此句沈思の上へ案じ考へ行ふへし
風も高をみ春の情心しさ
雨も多夕山のくも長深にて

おもしろみなき也

かくのことくうるさき事はまさに風雅なき道也
意得前句を見るにもへし唱へたるなるへし

一 有文無文といふ事

有文といふはあやあるといふ事をさす文体と云つく
解くなひて言んにはあるときはあさ無てふかきを
いふ也こゝろのうちに深く思ひ入たる句なる
へし句作はひとつめにして手にとる事いふなりし
人に聞えとはいふなり是無邪なり
無文体とはあやなきといふ事なり句作り思ひ
なりたる物まねき旅は浅いひ流えし能り

たゞしてふたゝびこまやく味ある事にたらなく旅
の形をなしきを一見に好色利欲たぐひなるや
なりけん能々修行すへし

一 我句を人にきかしめてそこへぬとおもふところあらは
よく考ふへし自句はそこへなりとも人はうたかふ
ものなり其人々の縁語をのみとりて我も
さきもおもひよるとおもふうちに性質のちかひ

一 前句に附る事前句を能くみして案すへし
其句のおもむきにまかせて句をも切てこれ見に
附る事一句の精霊をへつらはず一をもつて次の
句はきはやかにいふものなり

一　連俳の作者ハ自句を連言と思ふへし
人の連言ニあらすあしさやうニそしらぬ句作の
悪人ハいひおろしぬるのなり誠ニていやしき事
自句のあしく後りぬるを嘲笑の者の無益なるへし
一　句ニあるかなき句を覚悟すへしいはゆるへたりとも
本人の面目なしとく死句ニ近し活句ぞといて
あり活句ハおのつから脈通し死句ハ前後字無なり
一　俳の句韻字留り前後白き其字は濁字源さ
おちて韻字をとりわけ俳諧附あり下乃
句くハ全く俳ニ留同字かなり俳を全く作まて
留るなり三句七句のいはゆる指の時なる事也　百韻

前句ニ一字とし出てる事ニ出る有るもの也
近年ニ首俳諧句の流行し俳の字と絶えぬる
中之内韻字留作字留出来て古よりの有る句行
俳ハ作きことにて有るなり
俳の韻字留の和歌連歌俳の事
指連集ニ中納言待ける時右大将源乃
致方朝臣のもとへ八重の紅梅を折てつか
はされて
流俗かくいはる事あるは梅のそ
右大将　実資
珍らしきよりつくる言の花の人の我
致方朝臣
よそにさしう松ほとのこそつきて松風

ぐきける
さよ嵐にふけて衣さむしろぐさに冷る　天暦帝
御前の侍ふしまて參らしける
夢にあらへさしとやこまる哉　滋野内侍
こと延て好まくぬ義なといふなりけり沓句かきし
冠句とも折句につけ五句三句七句不ともて
書し來證奥儀三国にもとらす創におこしくたし
置しそれなれ三ツその折數あることにて終年に
讀み冠に三題をおりてよき者にて冠折し
あり百韻百へ此巻もしてそせぬなり
すくり昔連歌の創作を述とし此道て好むしくを望

字る趣し
一　初表句席の席三の折破名所の折意とすり初折
二の折位に三の折まてみて後て名残の折まて
句並にゆくしとすへし送り百韻の法ならす
今此の首飾初折に出やけりことをいへ名残の
折におこる事しくなきてあることを云ふして
料に清ふに長短の題を引て繊に一首流首
とゑくるやうん
一　御傘をくるしきの説の使ふに許すかれにてハはなれてと
人論にせぬに二様の方にて居所にせしめなさくまさく
好事をいふよの条し用ゆる者何者とそと字趣

京極黄門定家なるのかすを當てことゝな
てし嵐雪なとの作やまと歌に於てハ新式
無言抄玉露抄なと御傘なとの
筆れ法度をとく守るへしなとの法ありとも
先ハ我らか絹へ出席するへしと思ひて私に
見る事ともを書出し候

一 三句の離れ事ハ京を出しハかゝりを巧に案じて
行へしゆやりとさらハ長遠の海手なる山に
成事なりされたるをいひさらしそれ句
其同くハ同し山手なるゆへ二字手て揃ふる
つらし同しん事のぬきて其限りをあらし候

一 神祇 釋教 無常 戀 述懐ハ一句
まてにても付けかぬハ同句二句續きをるあとは
なれくと三句へ讓るは我を送りてなり又一句
手て捨られハやもめの衣とてふ吉をなき

一 名所も単同字せ分くなし 浦 山 里 水 本 草 枕
其類一二を除て高千三句四句隔るへし手
爾何ふ當季なし懐紙つゝとて折安なり

一 傍生の植ふや手長なるなし戀舞同し
言葉ふをいふとなりきてるすなり我句手を
此文ハ一座通はいふへしと思ひ出す案の如く其
云候ふをいひおきて無しきこの絹限不實於てなし

早稲田大學圖書

かやうの後続く時は悪し
一 五言にして切字なきは次第に切
の働きありて始めは句にのこりいやしく正体なく
して俳諧に疎くあしく其事細なる人のすへし
初心の者いひおしたる句などこそまことに古人
の句など少なからずなりとして俳諧にはすまて
流義なし たとひ其毎ならうまれさとて人を
まうしあさむくことに花とあるにや和歌の
詠みん賞玩に極まるへし分くて見ん時を対る
手習す一日千夜失あり給ふとも草紙
あらく習ひなくべき年々あるを財宝といふ

きんや猿のあき申さんかなし
一 発句いひ出でて手をとこめたる句あまりに 結句
をれの唄まて俳過し其之世風京ありとまて
まうしとあるへし 大きに其之も其の巻頭
との句過し発句猶ほ付合ありなか其之まて
様段大なる其の歌過へし
一 十体の方法力体柱為体を学へしとあり
これに二つを骨となして堂階をまちえてまする
ものなり
故郷有母風涙○旅館無人暮雨魂（○落字）
といふをまつて称するの心くらん

こゝのかへし云はあらしの山風
此二句は詠歌なと京極黄門定家十体の内
拉鬼体へ入候ふ事なり至極と
申しかたきに付只誠をもつて一とすへきなるや
幽玄体有心体長高体濃体麗体面白体可然
体一節体見様体強力体なと十体とも誠を
本とすへしと謂なり
一本意をまもると云事意念無窮なる事之
句毎にあらんとては大かた本意をうしなふと
知るへきる所の事人の無きをとらへてぬるをは
ゆかりの人は花をと折りなからその類ひなり

あけてかれふ寄のつゝ次
一稽古は人附句をするふ事を上手は手取をと候る
また句ふ長場をと長くへし上手の句は無理なき
ゆへ三句一続ふよきの有るも上手は次はなきとれけ
也とし人は句ひとつのなきは争ひ附て無理なし
一雑句とは人は新をも附句は賦物をとえてすへし此
心ひあるれ夕人へし幽玄は花句と云やし
やさしき句に沈思をなさきゆへ良つもしきは句には
なるや御附に心の句をとある人も組ゆつまり
付もし付へもし句は沈思は上見て句を附あるれ
其のなり雑句をたもち下をさまゆへなさへいしの

さりあらは先へ流けやうにかうし時を移し
沈思して見るに句になるべきものなりと仰
られ侍るとし
一 稽古比とまりて替ひあり 発句の時候を季
もなるべきすることのなり 先人は新古の発句を
離れて新式咄出る事なれは 按句出来るやうに
発句の時候をも定め一座へ流るることなりとぞ見ゆるに
初心の仰く人好みにまかせ候
一 まとまりつきて落ちあり 出来たる初会にて
去るは夏なるや 秋冬は去年との類 婚姻祝言に
別きの洞 秋去哀悼く事は中あれば枕の文

さりとて年の賀の喜びはさまざまに
枝折りたるの類 加持祈祷相よろつ神のたぐひ
湯奈浄土のさまざまに仏教の類 元服神前婚
譜前にさゆる小雪ともの露の霜とあらそふ
乞ふて親子のおさまりの際のその素にて候ふに
行事の子東都にてあるそなとの類 新党の去に
嫌ふところ相応とや秋の積る類 感想
の去年 世の中の苦しうつりゆきてふることの秋も
よし夏の浮世なり物さび夏蒼えて梅しきは枕の
類 送る去の去年うつろかはりにいふなるく三ツ
せ川 迷ひあつてし中来の為血の池のうは

一切地ふくれ唱ふやうなる事いふへからさるへし
一二を挙て云ハゝ月次常の会席ならハといふ
ことはちんきをまへいてむこの俳諧をもてかざ
りうつさなと好みて口ずさむ事あり一生のうち
いやしき事ありあやまちハなき次第風雅の
たしなみ有事

一句口にかなひたる句をひとへに吟するへし
来りん吟ちうりなと古人もいひ伝たり捨置
古人の歌に
　奥山にもみちふみわけ啼鹿の
こゑきく時そ秋は悲しき

とありといへる事は上を略て称へぬまての覚ゆれ
ハさてそのきとは抜萃こさと覚りたり心と吟
ずとつにありてかく称をはふそ俳諧
[illegible]あるましとなすり口とけ[illegible]ゆるさありは
初心なれはそれを以ふもくは俳諧の事はさゝゑり口に
[illegible]として郷に心をよき人に見る事
こさる事行住座臥俳諧をもつて句をも求む
[illegible]し月花を見てもまことにもあつまる
発句をし前句をして[illegible]しへし和歌
手練なりし心を師として其[illegible]
[illegible]

一下の句を秘蔵の人に知らせぬ事としてあるは
俳諧稽古の為に和歌の詠をとりなして此
事をゆるさぬにや
一百韻興行折面に至る時は初心のものは
七句まで去嫌ひなし七句の後のものは五句去
五句の上のは三句去り三句の後のは二句去越と
ゆるさるゝ也それ迄の後をさし去かるべき
ありえんを和漢漢和の時は七句より五句五
句は三句二句を二句去越也花月の定めなれど
新式にありこれをさしてのとらゆべきなり

俳諧

稽古一葉集

下

桐の一葉巻之下

芭蕉庵桃青著

手尓於葉留之事

一切字留之事
かなもかなやしじぬらんかけり
ぞれずつせよへけいかに
右十八字

一かな　治定　この外ふかなれ　初ひのかなてかな也
右三ツ此かなの外にうくかなまつむかな
皆立のかなといふあり未来ニツなり

三ツかなハかへて思惟をはなれて含蓄ゆへあること
フルムクスミツかな留りまでかなとは留り発句ぬ
このかな上をかるへハ治むかなすこしかなと留る
をさむ用をし祢かひあるなりどもかなとも
何がかなあり

一 や字七ツあるやといふ
切や 切のや（とゝめ） 中のや（ハツメ） 疑ひや 哉や（治ふるや）（かな）
すみのや（四ツメ） 捨や 口合のや（三ツメ）
中のやすみのやもにやの口合のやまてを我留に留
て留よくなるしこのほか名のや四ツのや一字さしてや
然りや なしとの類 切字にあらす

一 し字三世のしといふ 切字のしと云る過去のしをたてハ
めたるをもつし（現在のしといふ） そるてをかくきくらいに
過去ふハこをたる切字なりしをむかしを過去のしを未来ふ
なり味あへし未来のしハ示の字ふかよふされ
切字なるしし文字濁りをさるをみをま未来なり
用ハ冗しいえしこさりし治数なり

一 ぬ ハ畢ハ切きふのぬハ切きいれ（イキシ）（十二ヒ）
三イリ打止のをもし止ミハ後の事なり 後ハ冗の（ふ）（畢） 神をいのぬ 鳥ハ夜ぬ（ふ）（畢）
かくれぬをさをも上をかり洞のあらいふへし

一 を字 一字をくいうふかすふニつのをこハ詠ん
上をとりんをゆく

君こそらん 見せん 為らん 寐らん 浮らん
咲らんなとの類皆一字なる〇なり 浮らん
浮むらん 咲らん 為らん 絶らん 別らん されと
二字なる〇なり 有らん なからん 是三字
なる〇なり 皆切字となるなり
浮らん 止らん乃類二字をばいふ このあり
これ文句なり 浮る 止る かなるかなをとらニヨブなれ
又一字なる〇なり 至ラリルロの 浮レラリ 止レラリ 等なり
一 〇錠なりやといふうならひなるにし 浮きゝなり
并平なほの〇〇〇いへる〇〇 〇銘 〇〇なり
〇ふ 浮〇れ〇なり 味〇へし 浮〇〇〇〇は切字

平なるにはさうなるべしかやうしかしら云しら
かへりいふは切字平なるなり
一 かな 落着おさへたるなり 発句如何不審なり
子細なし 下平なる時は中七文字の末に かな字有る
なりて なりといひなれたるべし かな字まで押さへ
秋之平句なるやうにならぬ故なり
かり（二字） かさ（一字） かりし（三字） 皆同し 露しの文 かりの文 て ぞ
一 ぞ 斤角落しつけたる詞なり これぞ [illegible]
かく一句見つめたるなれば皆なり
一 は 落着は留るはきは川如類なり 也のなく
いふ迄もなく 切字平あるは 留るはつきしつ 何ぞと

ぬ一轉なりときぬ詞なり　つるといふ字と　清濁
なる字なり　落花ぬるといふ字を　捨て咲ぬ
といふ字こそ清なり　こさし濁なる字を除
きて清終せぬなり　いふ迄も下知なる字といふなる
下知なるて切字なりなるなり

一す　右本にも迄ぬる切字なり　大かたは五七
五ぬ留りに立字なり　移る右なる事へ切字なれ
下知なるなる立字をも立てととまるなにき
れは月雪で郭公　梅桜等の言葉なとを迄
立てよしされはおのれ切字なり
古歌　ひとり見るへしあしたにはきけ

縁語　御蒙なとのには　雪　深
なれ類なり
一ぞ　かぞさ下知なり　又それよりこれよりも行月なる
ぞかるもあり
一せ　かくしきたる下知なり　とやしめたるに他より
なる文に清くせなといふて下知なるより深くし
うかるれのさかるなり　それの反し　せなり
深くにて清くせなり
一まし　まし下知にも同しかるも　氷まとなる　自
言もあれ自　一字なり迄ぬもあり下知を知て迄下知
うちのくも下知に自にあり　味へかへし

一へ下知にも自他あるへし　治定之へといふも
あり　我なるを平になしてへ下知にも
あらはるゝへハ押へなしとするも下知なり
一を　二つあれ　咲けあらし　をは下知　嵐の秋
ふけ　自　をは平なけ　自
一いろは四十八字みなきれ字なるいはれ有る
なり
右十八切字なり　初心の人あやまりなき切字用ゐるなと
なるれは上五なりへ平の四句は平なり句の餘に
あるは一の切字なくても治定なるなり
かな切字にて治定を本とす治定なきは

平句なり　惣而発句をかへしていひなすやうに平
句へしのまふとも発句の心は一して
そのまゝ躰の切字の數之
多く句のよりてる発句平ても有し　上五を
まけむしと申へきなりは櫻とこさくへの字いゝ
梅ところるやうにきへし　都ちよる下を平
這平いひはなるからかきよ様につきとれて
一脇平なる人へし　脇をたる人はなつかしくて
あし國勝をらく言外の言線あるやうに
作りなるへきなり
一句の　ゆ　くる事　言ちなかるらし　なる

一ありきたりせわりまへり　へりくり
かりよりある
一かりそあふられ　さうられ　りうれ　さりしな
至ぬなるふしかんもりある
一ともしいもし　もいふかう縁なし　同しゐ
ありあしもりある
一さいかいやかいぬなり　れもふへきかそ　不思　いふへき
やそ家やとはかりいひかとなかりしかへるて　手に
祭なり　中のやより以る
一ありそ　ゑけせてねへめれの王者也んでふて葛根之こ
こまふに　様なとられこけ　袖なられそされ　在た

られてなせ座こそはせ称家もそなるりうえ女
とこいひなのふとしそより出る
一なりなりなりなるといへえ如子ふなふに
一いつきいつこいつくいつるいついつかいくらいり
いかにせんいかんいかていかにせん
いかにせんとて下千いなにいかりせんを上千に
なれなそきものいさいさゐさそおもひやるなむと
ところつふつんなり
一涼し　婦し　然し　いとし　なつかし　ゆかし
うひし　なとの類　涼し　ウミシキ
なくしきさといひそ涼浮きたるゆへ如きなのなり

こそ字いれて切るゝなり
一思ふる　留る　待ちし　切なり　れもなし　れならし　御ざ候へ　の切
こ水は短絶なり是に備へてこれはなり
又ふへし　遊ひ　帰る　過る　香る　集る　梅るれ
顕なり留しといえもしめきを切字ある所
一あれなる　あるなり　とうして　あやれいまして
さゝれしやしくをいへて切れ
一大田しといふは下よりよ年へまはしてよくもなく
うきなく四勝たる句となり
一とさしゝをいふは二つあり一首を絶として
そといふは一首をせんもなきといふさへる年

かやうにしあり
名にしさうてい歩ゆさしくこましとこ見親
一声切こそ是を三示に切字入たるなり　なもの
とまりにあるそい切字えかりをも同申おれ二ッを
手にをと見なり
一三段切　れもしろうき角さ五七五に三ッなふへて
いつれも是照あるやうにいひ是なり
一三字切　さかれは寺切句おなりやうれる手
よて是上手名ある切へ付るなり
一二字切二字といふ名あれと諸絶の示とて一字なふ
ては切字あらてはなり上の切字やうに立るし

ぬやしはなる法なり　たとへばむかふし　上下
まてもて一の拍と当るはよろしけれども連も
むかふし用中まてぬやう下なるなり
凡源しの何とても處に拍
せうの拍あり一の源拍なり上まで何處なり大永
七年四月　梅のまちをと源叙の書きや白ふ居ん
道逢流厳師の句なりそのうち言好なり　初心の
人好まじき事なり
一此局ふ拍返しあり拍のうちにはあるにはかにも拍ふは
拍つ当の拍と何なるの拍なり　見るは　又申るかは
ひとのかはこ拍をうちかの拍とてあし

一うたひ一拍子ニ不とかる事
四拍あせや蕣種を拍ふらん
あし
四拍あせ乃蕣種や拍ふらん世
四拍には何も拍しかゝて何処にいふそ蕣種かと
うたふよし
一かんとむの手にてはやとうたひかへるは素来にとり定
まる法なり何よりてもうたひあはせは着しからは
紫式部川乃題なり　未遂待ぬらん
一無上子なとてもかゝ当るかと上下其外とたしむとたらせ
すめていとせるるに題にて下子候に及なし

豊の秋とまつり竈をまつる人

なきたなるへしと有り 此句へしは治定なり 不定帰る人とせる

ましきなん 恨へし治定の字なり

一 てにをは 現在過去あり 未来もあるも現在と来もしまる

言流なるあり

上手なる人は体の詞ありてもてにをはと用に

一 にてにをは 無き字をいふへしからぬ 余字なき さへなき 山拝字にて

留りの字なるきこれと留の句にてなる段なり

大かたは発句は留りに心を付てと留めなるへし きれてさける

うたふ中へなり自然のね自然のにては割の恨にて

一 如て あるへし

生得の物とは春夏秋冬のなる物 春の物ふゆの物なとの

類にてといふ也 又生得の物とは其ものにて有るか

またかなりまてさやうにてなとの類つねといふ也 又有り

きれと心得て様々なり

一 にてにて留の時は一句下知いふ也 下知ある時はにてと文字

よみと文字にて拝へて字細なり

一 拝一字一字ニ示ありて云ふときなく人のとゝめてをる

発句の切字のかはりにて留て為留りへあるかきれ字なき拝へ

字といふなるし

一 上手抔といふ字あるもなき乃れとまりて無用の留り

なかれてハ世あて法なり 留り手 キシルクリフム ヨカヨニ 乃文字

まてと云へるなり

一上下の句遣去のし文字にて留るは法にあらず　是去のしまでは下に羽なくては出来ずるなり　是本の句を見出すに是去のしまて留たるなり　一句世界とするなりやまと人を

見るはなるよはぎ種々日乃あるし　是云

是心さのみ面白と思ふへし

ぬるなりむかふしを留るなり

雲まし雪ふし人のなかなり　言葉の始し

一発句留り大なるし雑句なり見田の上手は悪子ウクスツ

スフムユルシなとの終に字あるなりフルムクスシツ古来

の留なり　声にはをかしきなり　なとへたへ人来ると

ゆるゝのみ見ゆるとはいひかたし　ものゝとみゆれ

かくのおもしろきの字の入やうにさゝるなり　見あけると留

の字をといふは西方風流あるゆへ也　涅槃仰見あけの

見あけるとも文字入様とはしくなり　此外浪の上手見田

あまのかふ見あけ様の手見ゆ下をは得るにもなく迷るの

字をあけ云々なり

初伴見あけ留る上手風流なる面白きことをいひて

とめへし

一下の句の留りのことかなり　其返して明るやう

にすへし　月花なとにて利口なる句なとすへし

きれ字の心得無くと延てもなり

一連歌に入て長き心に五文字大事なり　五文字一とゝて
加へ置やうにて定るなり　連の字中に七文字の切字に
至るなり

さへしる月のこゝろを出に書にも

一下の句にて留りをとゝ也　是を下にせぬ事也
と秋るもあり　下の七文字にも風流を以てなり　上の
七文字をはいかやうに成るにふるし　次の
下の七文字にて雪を初め来て春に花のくて
おもて下に付て上く下に句にて置なり　八句文字
まて松さへ入置なり

一下の句に留り　句は切字留る事に以ふ言葉也
ことなるなり　下の字手には文字なし　秋にも雲は
留り句は秋の月には雲を留り句に置しも月の
身を連歌に出し句に字の長を初めて留り句に結ぶを数珠
ことのならひに句を表なり　ふこの字を拾手　ゆきさは
留り句は頓ていや上の字の下のさらに言ひ出してまうて見ん人を
字用なれは上の句には一まつ書き始めて　大名にも
たなるなり　上の句にはいつる立てしを　四季の字こそ
連歌にても織句に句と留りは一句の内に物二ツ
あいて不可留事なり

一物をさこ留るものとして　前句を続ける事留様なり

一語れかまてにて小てと留るなり
　夢路とも月(?) 又ハ月ハ萌しまて
一小歌てにはまことにおもしろき作例
　道あきらか殊に唐れ来るくらふ事あらき
　あまし秋人(?)も新しき敷て新しき道
一八文字九語ぶさへ詞を作りを誰も此字に五(?)兆
　語ぶ其又あるおもしろき手本なり
一下の句まで絶て其上ひとつ事なる事へ上七文字下
　七文字五七して同しものにあはゆるやうにする
　なりあれども一節にもまた文字入て句作るなり書を
　其のへたりあるも遠き事をも作る事も小ある字

をとを入七字なりあるとは横本とい小さく作るなり
一名高きなるをぬとかはるい一句をばおもしろくいひ
語あるあるい曲なるきなり大かたにいひ出て文句は
人にきとふならやうにたへきなり語るし
ひとつとしとはれけなるい世をたくさなり十をも六ツ七ツ
なりける語をそてあとの三ツ四ツをも言葉にあふなる
至すまま人にゆよとも人にも云しなり
一すこし詞のまま次第のうちにまた面白をいるなりなり
其三字をも必あるなりこれをてまさぬ作者にて
いひ語あるなるをもおもしろき事なるなりもよしく
いやしからむたとへてもあるさかしきそへなるもあるしに

神さへてらにあるを定て於嵐神さへてとよみ給ふを
あらしなとかけ年立ぬ春のみかとやと申し
この事にて候
一あけ句結構候發句の字入ぬやうに有度候
まる發句に付候て宜き事にて候根言なと候根言に
さる大かたにきこえぬをとりて前二の句に付
なる事物なと出されたる物なくあるまじく候へ
一さこは能なとしての手せよと有り其家はいふ
入てもの句にさはらぬ物をいはむとてゆる
こそあり扨はさやうにさとりけのさやけきたまもの
類なり

一の句を句はおなじへこさせてはとてよく存は云候
所くやうにも候へし
一とはかりにと句留をもの於句の手世話の二字の事
まつ〱の句へし
一句二て句ぐん句自然と句もちり句發句の様と見
結び極めて付の句なとしおれ之そ粗に
始めのかやうに句面にて候ては句けせとも有へきをめぬ
まことにてまてこそ之の句やう様は句之
字をやかて句の類にてあり類字句立て漢和
於付せん類候なり筆も類の風流なる文字まで
句なとの可せらしかるべく候

一静韻といふハ常に縦横にして下の句をとりと帰よ
稀句よりの韻をと帰むなり 是も発句にあるべき字
中の韻字ハとらぬ帰なり
一句中でまもの字気を用捨すべし 上手の作意なる
句にハ何でも何ぞといふ事構なし
一四時の季を用ゐすれバ自然にうつて其季をも用ゐる
ことし嘆なき事也 二季又ハ冥朝迄夜に用ひ来る事用ひ
として不切の作者必古人の用ひ来らざる二季を用ひ
句もあり 自然もあり 先生なし 食歎するハ草を
勝すて 草木年行良辰の放る事 古人てせぬ事の
事なり

一句理屈なるいはゆるの作句あり 此句ハととと云
此言葉の池中にうかたるやうに見せたるかたちありの
作に作句あるべし 手爾葉の道のやうにハあしゝ
心に思ふ事句になりぬ 其の句作り也 上手に云縁
就中いひ姉したる不言不尽の余情あるなり
一前句をと吟味ありて 詠て句と云縁の縁小事ゝ
までよ趣向ある句とあるべし 能き句の道を
見る事し
一付てみえ ききてみえ 捨ててみえ 言年の縁あるへ
てみえ それより縁さしへてみえ 其よりしてみえは
招ありひてみえ。 言葉してみえ 思慮てみえ 作り

一 手まり歌　うたれてまゑ　くだけてまゑ　ころころころへ

てまゑ　あふいしてまゑ　まけてまゑ　ふつてまゑ

一 たれ手まり歌是を歌ふにも大切なり候まゝ

古流にては用ゐ南流にては古風にて古風を

以先まて言語は平すなり然しもなしまかり其手まり

一 あり南流にはおも向新流を見届ころく随ゐ申へ

手まり歌にあらず流されたる描句四季有なと有まじ

ならり

一 相撲歌　大尾

梁見蔵